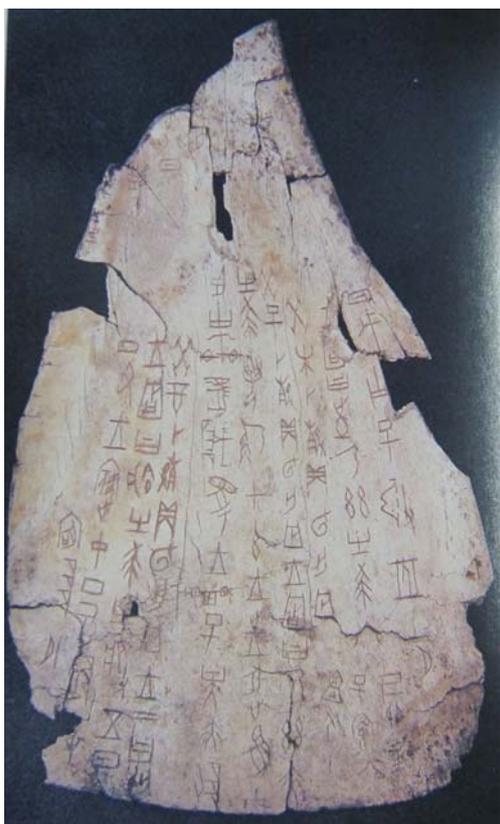


甲骨文字 —その解読と後代の同系文字—

吉池孝一

一



『書芸術全集第一巻殷・周』より

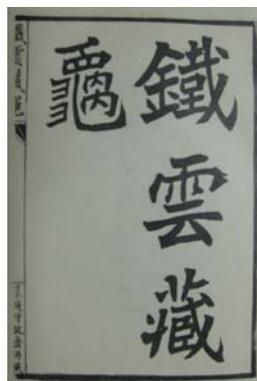
歴史書『史記』によると、古代の中国には、「夏」、「商」、「周」という王朝があった。商の創始者の湯王は、始め亳(現在の河南省の偃師県にあたる)に都を置いた。その後、いくたびかの遷都がなされたけれども、『竹書紀年』によると、盤庚王が殷に移ってから紂王が滅ぶまでの273年間は都を移すことはなかった(「自盤庚徙殷、至紂之滅、二百七十三年。更不徙都。」)という。これによると、盤庚王から紂王までの都、即ち商の後半期の都が殷ということになる。殷は現在の河南省の安陽市小屯一帯の地域にあたる。後の周代の人々は、商を殷と呼んだ。日本でもふつう商を殷と呼ぶ。商すなわち殷の絶対年は分からないが、古く見積もった説によると紀元前1607-1111年、新しいものによると紀元前1519-1023年ということになる<sup>1</sup>。この殷では占いが盛んに行われたらしい。その後半期の占いの記録が亀の甲羅や獣骨に記されている。記録に用いられた文字が甲骨文字と称されるもので、われわれが使用している漢字の祖先である。

二

この文字が記された亀の甲羅や獣骨を収集し拓本を採り書物として刊行したものに『鉄雲蔵亀』がある。『鉄雲蔵亀』は、甲骨文字を始めて世の中に紹介した書である。これは劉鶚(字は鉄雲)が1903年の11月に出版したもので、本文には甲骨文字の拓本が収められて

<sup>1</sup> 商の湯王が夏の桀王を倒した年代と、商の紂王が周の武王に倒された年代即ち商の始まりと終わりの年代が問題となる。『史記』に出てくる最も古い紀年は、卷十四「十二諸侯年表第二」の周の共和元年でありこれは紀元前841年にあたる。これより前漢の武帝の太初四年(紀元前101年)までたどることができるが、紀元前841年以前の紀年はわからない。しかしながら幾つか説はある。古く見積もった説は紀元前1111年、新しいものは1023年である。それで、『竹書紀年』によると、湯が夏を滅ぼし29代の王を経て496年かかった(「湯滅夏以至于受、二十九王、用歳四百九十六年。」)とあるから、これより商の湯王が夏の桀王を倒した年代を推定することになる。紀元前1111年説によると、これに496年を足して紀元前1607年となる。紀元前1023年説によると、これに496年を足して紀元前1519年となる。以上宮本一夫2005;307-311を参照。

おり、巻頭に序文がある。この序文こそ、甲骨文字研究の嚆矢であり、その後の研究の原点であった。



『鉄雲蔵龜』



拓本



劉鶚

**甲骨文字の発見** さて、劉鶚の序文によると、甲骨は己亥の年（1899年）に河南省の湯陰県から出土したという<sup>2</sup>。その後、壬寅の年（1902年）までに劉鶚自身のもとに五千片ほどの甲骨が集まり、そのなかより千片ほど（正確には1058片）選りすぐり拓本に採り、1903年に出版した。なお序文には湯陰県から出土したとあるが、その後間もなく羅振玉によって、安陽市の小屯村から出土したことが明らかにされた。もっとも、甲骨片そのものは1899年以前より出土していたであろう。甲骨に刻された文字も人々の目に触れていたはずであるが正しく評価されることはなかった。刻されている記号を文字としての確に評価することができて、それで始めて価値と影響が生ずる。正当な評価が為された対象としての甲骨片が発見された年として1899年は重要となる。

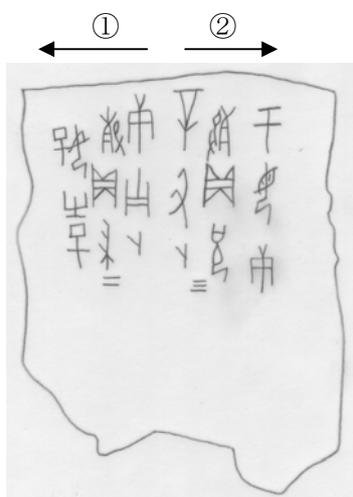
**殷人の文字** 劉鶚は甲骨に刻まれた文字をどのように評価したのであるか。序文によると「祖乙、祖辛、母庚は十干を名前としている。実にこれは殷人であることの証左である（祖乙、祖辛、母庚以天干名。實爲殷人之確據也。）」とある。手元にある『史記』をみると、確かに殷は王名に十干を用いている。これにより、出土した甲骨は殷人の文字資料であると判断したわけである。

**解読の手続き** そして、劉鶚はこの殷人の文字を、序文に記した2つの手続きによって読み解こうとした。1つ目の手続きは次のとおりである。序文に「六書の法をもって鐘鼎（青銅器）の文字を推し求めても合わないものが多い。さらに鐘鼎の文字をもって龜板の文字を推し求めても、又合わないものが多い。上古を去ること遠き故に、文字も推し求め難いであろう。（以六書之旨推求鐘鼎，多不合。再以鐘鼎體勢推求龜板之文，又多不合。蓋去上古愈遠，文字愈難推求耳。）」とある。ここに解読の実践が示されている。六書の法（象形、指示、会意、形声、転注、仮借という六つの漢字分析法）によって鐘鼎の文字（周代の金文）

<sup>2</sup> 湯陰県は殷の紂王の離宮鹿台が在ったところである。戦いに敗れた紂王が鹿台に火を放って身を投じ殷王朝の幕が閉じられた場所として有名である。

の解明に取り組み、次いで鐘鼎の文字を用いて甲骨文字の解明に取り組んだということである。言葉を換えて言うならば、後代の同系統の文字及びその文字の構造に関する知識を用いて甲骨文字の解読に取り組んだということになる(手続き1)。そのようにしても、「合わないものが多い」と限界も述べている。2つ目の手続きは次のとおりである。序文に「亀板は皆欠けて破損しているけれど、幸いにも、それは卜辞(占いの言葉)であり、文はもとより甚だ簡単なものであったため、時折その内容のあらましを得ることができた。(龜板雖皆殘破。幸其卜之繇辭，文本甚簡。往往可得其概。)」とある。殷人によって書かれた内容は、ほぼ占いに限られており、しかも幾つかの形式をもっていた。卜辞の持つ形式の概略を見だし、これを利用して甲骨文字の解読に取り組んだのである(手続き2)。

### 『鉄雲蔵龜』にみる解読



『鉄雲蔵龜』第 127 丁

左の卜辞を劉鶚は序文において次のように解読する。左側①の文は亀版の中央より縦書きで右に行を追って読み進む、右側②の文は中央より縦書きで左に行を追って読み進む。

- ①「庚申の日に卜して再び問う、歸好の子か。(庚申ト厭問歸好之子)」  
 ②「辛丑の日に卜して再び問う、母庚に贈るか。(辛丑ト厭問兄於母庚)」

結果だけを見ると簡単なようであるが、このような読みは、卜辞の一定の形式を見定めて干支が文頭となることを理解して始めて可能となる。この点は先の「手続き2」によるものである。なお、①②の卜辞を漢字の楷書体に翻字しているわけであるが、このような翻字が正しいかどうかは別として、この点は「手続き1」による成果である。

**現在の解読** 現在の解読は次のとおりである。

- ①「庚申の日に卜して**殷(貞人の名)**が貞う、婦好は子有るか。(庚申ト殷貞婦好有子)」  
 ②「辛丑の日に卜して**殷**が貞う、母庚に祝さんか。(辛丑殷貞祝於母庚)」

卜辞の代表的な形式は {干支 + 卜 + 貞人名 + 貞 + 問う内容} である。ここの貞人名とは、卜問をする人の名であり多数に及ぶ。この卜問の形式は「某某の干支の日に卜して貞人の某が貞(と)う、…問う内容…」となる。しかしながら、劉鶚はトと貞の間の字を貞人名ではなく、「初めて問う」「再び問う」など、幾つかの問い方を表わす字と誤解をしていた。これが劉鶚の解読と現在の解読の大きな違いである。この部分を貞人名としたのは董作賓氏の「大亀四版考釈」(1931年)という論文である。劉鶚より数えて28年後のことであった。ところで、貞人の着想の契機となった「大亀四版考釈」の中で扱われた第4番目の亀版の内容は、全面が「某某の干支の日に卜して貞人の某が貞(と)う、旬(これからの10日間)に禍いは無いか」という所謂“卜旬の辞”のみで埋め尽くされていた。この“卜旬の辞”の「旬に禍いは無いか」の部分、かつて劉鶚は「尪父(ト人の名)がトすか」と

読んだ。劉鶚は“卜旬の辞”の一部を卜人名と誤読したのである。この事実を董氏は知っていたはずであり、董氏が発見した貞人と劉鶚の卜人は“卜旬の辞”において繋がるのである。董氏が明言しているわけではないが、このような事実と、繰り返し現われる卜辞の形式から得られる情報とが総合し連絡し合って貞人名の着想に至ったのであろう。貞人の着想は先に挙げた「手続き1」即ち後代の金文の研究によっても、文字の構造を見ても、そのいずれによっても為し得るものではない。これは卜辞に特有なものであり、繰り返し現われる卜辞の形式に拠りつつ、その形式の中から直覚しなければならない。解読の転換点には、しばしばこの様なひらめきによる飛躍の瞬間がある。そしてこの瞬間より文字の解読は進むのである。甲骨文字の場合は貞人の発見によって研究は大きく進むこととなった。貞人はグループを為しており、そのグループと殷王を結びつけることにより、甲骨文字資料を時代別に分けることができるようになったのである。

### 三

甲骨文字で書かれた言葉と、後の“漢語(中国語)”がどのような関係にあるかを明確に述べることは困難である。しかし、甲骨文字が、後の所謂“漢字”の祖先であることは、甲骨文字と西周の金文(青銅器の文字)及びその後の漢字を並べてみれば、甲骨文字が一定の沿革の過程を経て現在の漢字となったということを認めるのはそれほど困難ではない。一定の沿革の過程とは、字義を明瞭にするための字形<sup>3</sup>の複雑化や、文字使用の労力の軽減を図る字形の簡略化などである。

**字義の明瞭化と字形の複雑化** 字義を明瞭にするため、声符(発音の情報)もしくは形符(意味の情報)を付加して所謂“形声文字”が作られる。西周の青銅器の杜伯盃器の銘文拓本によって当時の文字を確認する。



杜伯盃器<sup>4</sup>

この青銅器銘文の中に伯(第1行2字目)と寶(第1行4字目と第4行5字目)がある。これ

<sup>3</sup> 字形と字体という用語を音声と音韻のように使い分ける場合がある。ここでは不都合が生じない限りにおいて両者を区別せずに“字形”を用いることとする。

<sup>4</sup> 『書跡名品叢刊 金文集3西周』より。



資料がある。三国時代の魏の正始石經<sup>キョウシキョウキョウ</sup>であり、甲骨文字解読のロゼッタストーンともなる<sup>5</sup>。中国の“ロゼッタストーン” エジプト象形文字の解読の場合、この文字と内容が対応し



たギリシア文字ギリシア語が刻されたロゼッタストーンが威力を発揮したとされる<sup>6</sup>。甲骨文字の場合は、「後代の同系文字」がロゼッタストーンの役目を果たしている<sup>7</sup>。このような後代の同系文字の利用が解読の「手続き1」であったわけであるが、同系文字の比較は長い中国の歴史のなかでも行われてきたことであつた。現在に残るものに三国魏の正始石經（又は三体石經）がある。左はその残石の拓本である。石經の建立は正始年間(240-249年)。『春秋』の經文が、古文・篆書・隸書の三種の文字で刻されており、この拓本では16行分が残存している。右側9行は僖公の末尾部分。2行目に「二月。衛遷于帝丘。」とあり9行目に「人陳人鄭人伐許。」とある。左側は文公の初頭部分。10行目に「文公第六。」とあり16行目に「師戰于彭衙。秦師敗」とある。第一の古文と第三の隸書を見比べると、その字形において相当に異なるものがある。このよう

な資料は、古文がどのような隸書に相当するのかわかるための情報を提供してくれる。さらに遡り、古文が西周の金文の何れに相当するか、という点においても参考となる。その西周金文の字形の中には甲骨文字に近似したものが少なくないわけであるから、後代の一連の漢字系文字はロゼッタストーンの役目を果たすということになるのである。

〈参考文献(刊行年順)〉

董作賓(1931)「大亀四版考釈」『国立中央研究院歴史語言研究所 專刊之一 安陽発掘報告』第三期,423-441 頁。

唐 蘭(1935)『古文字学導論』1935 年自序。増訂本,濟南:齊魯書社,1981 年。

<sup>5</sup> 唐蘭(1935)は、正始石經はロゼッタストーンのようなものであるという。

<sup>6</sup> もっともスリ・アドキズ/ロイ・アドキズ(2002)によると解読に利用できた部分はプトレマイオスという王名の対応くらいでありロゼッタストーンという対音対訳資料が果たした最大の役割は、ギリシア文字ギリシア語の単語数に比べて対応するエジプト象形文字の記号の数が格段に少ないことより、解読の対象が表意文字主体の文字ではなく、表音文字主体の文字であることを発見する契機となったことにあるという。

<sup>7</sup> 唐蘭(1935)は、「後代の同系文字」はロゼッタストーン以上の信頼性があるという。

- 白川静 解説(1964) 『書跡名品叢刊 金文集3 西周』 東京：二玄社。
- 李 圃(1989) 『甲骨文選注』,上海:上海古籍出版社。
- レスリー・アトキンス/ロイ・アトキンス 著木原武一訳(2002) 『ロゼッタストーン解説』 東京：新潮社。
- 宮本一夫(2005) 『中国の歴史 01 神話から歴史へ 神話時代 夏王朝』 東京:講談社。
- 野原将揮(2005) 「春秋・戦国文字の変化～簡略化～」 『KOTONOHA』 第 36 号,5-7 頁。
- 吉池孝一(2007) 「文字の解説」 『KOTONOHA』 第 54 号,8-13 頁。
- 吉池孝一(2007) 「甲骨文字の解説」 『KOTONOHA』 第 55 号,12-18 頁。
- 吉池孝一(2008) 「鉄雲蔵亀の五問とト人」 『KOTONOHA』 第 64 号,10-14 頁。